

原田洋一郎著

## 『近世日本における鉱物資源開発の展開』

——その地域的背景——

徳安浩明

「鉱物の標本室」と形容される日本列島には、多種多様の鉱物資源が包蔵されている。そして、その採掘は、一六世紀後半～一七世紀前半と、近代の産業革命期にいちじるしく活発化したとされる。しかし、鉱業地理学の研究は、地理学の他の分野と比較すると振るわない。金・銀・銅などの非鉄金属を生産した過去の鉱山業の解明にあたる研究者は、歴史学をふくめても多くはない。過去の鉱山業に関する研究が低調な要因としては、いわゆる「水田中心史観」の影響の下で農業以外の産業が長らく等閑視されてきたこと、鉱山業が大幅に縮小した現代日本にあつてはその研究意義を見出しにくいことがまず指摘できる。そして、厳しい山法と前借金に束縛された労働者たちのつくる鉱山社会が、一般社会とは隔絶された異質・特殊なものともみなされる傾向にあつたことも、この要因としてあげられよう。

そのような中、鉱山業の歴史地理学研究を牽引してきた著者の原田は「日本における非鉄金属鉱山開発に関する歴史地理学的研究——江戸中後期を中心として——」と題する学位論文を筑波大学に提出した。本書はその学位論文をもとに上梓されたものであ

り、「近代化以前の日本における鉱物資源開発の特質、およびその継続を可能とした背景について、鉱物資源の開発に関わる総体に注目しつつ検討する」（一頁）ことを目的としている。

通読すると、低調な研究動向に反して、江戸中後期における鉱山業の社会・経済的意義の高さに気づかされる。そして、「その地域的背景」というサブタイトルが示すように、本書の主眼が、「鉱山業の盛期以外の時期も含めた長い時代を見据え、鉱山業によって成立した巨大な町の外側の空間にも視野を拡張」（二頁）することに置かれたことに、好感を覚える。三つのタイプに分けられた鉱山業の事例分析では、鉱山業の稼行状況と開発主体の社会的性格がきわめて詳細に検討され、周辺地域と鉱山業の関係が徹底的に究明された。その結果、近世の山間地域を扱う地理学や歴史学研究に資するところも大きい良書となった。鉱山社会をおしなべて異質・特殊なものとする見方に再考をせまることにも成功したといえよう。

評者は、本書によって、近世の鉱山業や鉱山労働の実態を、近世社会の中に位置づけなおす必要性と、その方向性が浮き彫りになったという思いを強くもった。本書に対する書評はすでに二編出されているので、評者は「鉱山業に対する特別視の見直し」に力点を置きつつ、行論にあたりたい。

本書の構成は、つぎの通りである。

### 第一章 序論

#### 第一節 研究の目的

#### 第二節 鉱物資源開発に関する既往の研究

#### 第三節 研究の視覚と方法

## 第二章 江戸中後期における日本の非鉄金属鉱山

第一節 明治初年における非鉄金属鉱山の稼行状況

第二節 江戸中後期における鉱山業の展開

## 第三章 武蔵国秩父郡中津川村における小規模鉱山の開発

第一節 中津川における鉱山開発の展開

第二節 江戸中後期の中津川村における鉱山稼行形態の変容

第三節 村と鉱山開発

第四節 中津川村鉱山における断続的鉱山開発の地域的背景

## 第四章 江戸後期、飛騨国北部地域における鉱山業の展開

第一節 飛騨国北部における鉱山業の盛衰

第二節 江戸中後期における金山師集落の再編

第三節 江戸後期の鉱山開発と在郷町商人

第四節 飛騨北部地域における鉱山業の再生と継続の地域的

背景

## 第五章 幕府直轄鉱山、石見銀山の存続とその周辺地域

第一節 石見銀山の盛衰と銀山周辺地域

第二節 銀山の衰退と江戸中後期における銀山稼行の実態

第三節 銀山存続の基盤としての石見銀山御料

第四節 石見銀山の存続と周辺地域

## 第六章 結論

第一節 江戸期における鉱物資源開発の特徴

第二節 鉱物資源開発継続の背景

第三節 課題と展望

第一章の「序論」では、人文地理学と歴史学における鉱業の研究動向が示され、非鉄金属を扱った従来の鉱業地理学の研究対象

が、鉱山集落を中心としつつ、近代以降の事例にはほぼ限定されてきたとまとめられる。歴史学では、幕府や藩の直轄による大規模鉱山業に関する研究が蓄積してきた反面、鉱山業の衰退期とされてきた江戸中後期の研究と、数の上では多数を占めた中小規模の鉱山に関する研究が不十分であり、今後の検討課題であるとする。その上で、鉱山業の歴史地理学研究に際する著者の立場として、鉱物資源開発に関わった地域を「総体」としてとらえ、鉱山の周辺地域における生産や流通のあり方、周辺住民の生業形態や生活文化について検討する視角の有効性が主張される。くわえて、本書の展開として、(一)近隣に他の鉱山がなく、孤立して立地した小規模鉱山、(二)比較的多数の鉱山が集中した地域、(三)江戸幕府直轄鉱山、という三タイプの鉱山業について分析していく方向性が示される。

第二章「江戸中後期における日本の非鉄金属鉱山」では、まず、『日本地誌提要』を主要な資料としつつ他の資料も援用しながら、明治初年までの全国における非鉄金属鉱山の稼行状況が検討される。その結果、江戸中後期には、従来の研究では取り上げられることの少なかった中小規模の鉱山が多数存在した実態が明らかにされた。明治初期における鉱山をもつ村の分布が示された図2-2(二三頁)は、力作であり、日本列島の山間部に、きわめて多数の鉱山が広範囲に立地していた様子を理解することができる。

つぎに、江戸中後期における鉱山業の展開について、既存の研究を整理しつづまとめられている。この時期には鉱山業に対する幕府や藩の関与が減退し、請山による民間の果たす役割が増大したことが指摘されている。その際、大坂などを本拠とする銅吹商

人が強く関与したことが述べられ、実際、大坂の泉屋による一八世紀前半の諸国鉱山に関する情報収集の実態が明らかにされた。そして、鉱物需要が増大する時期が度々訪れ、鉱山開発を奨励する触書が繰り返り返し出された点から、江戸中後期にも継続的な鉱物資源の需要があったこと、鉱山の新規開発や再開発が必要とされ、各地の在郷商人や金掘職人などが関与したことなどが確認されている。

第三章の「武蔵国秩父郡中津川村における小規模鉱山の開発」は、近隣に他の鉱山がなく、孤立して立地した小規模鉱山の事例研究である。中津川村（現・埼玉県秩父市中津川）では鉱物資源の需要が増大した一八世紀中ごろと、一九世紀中ごろを中心として断続的に各種鉱山が稼行された。そのため、中津川村の鉱山には継続的な鉱山集落が随伴しなかった。鉱山の開発主体は、周辺地域の有力者や、江戸の鉱山技術者、町場の商人などさまざまであったことが詳らかにされた。

そしてこれらの鉱山の稼行に対して、村方は食料・材木などの物資や労働力を供給し、開発主体となることもあった。村民は、鉱山開発を望ましいものと理解していた。そして、秩父地方と江戸とは、立木の伐採などが江戸の商人によって行われてきたように、鉱山業が行われない時期にも経済的に深く結合していた。鉱山開発の主体として他所の商人を受け入れた素地として、村民が外部からの資本や技術者を受け入れた経済活動に元来なじんでいたことが強調されている。

第四章の「江戸後期、飛騨国北部地域における鉱山業の展開」は、比較的多数の鉱山が集中していた現・岐阜県飛騨市神岡町域

の事例研究である。ここでは、一六世紀末期から一七世紀初頭の繁栄後、規模を縮小しつつも鉱山集落が残存した茂住銀山の衰退と再編成のプロセスが検討された。あわせて、銀山の衰退とともに鉱山集落の廃絶した和佐保銀山の再開発とその背景も詳細に分析された。その結果、一八世紀中ごろに戸数を大幅に減らした茂住銀山では、残存した金山師の家内労働力による鉛山稼ぎが継続された。金山師は採掘を依頼する際に、代々の金山師であるという由緒を語った。そして、鉱山業や醸・楮などの商品流通で蓄財した地域の富裕者が、零細な金山師を経済的に支えたことが明らかにされた。一方、和佐保銀山のあった栃洞地区における一九世紀初頭ごろ以降の銅鉛山の稼行は、周辺地域の有力者や金山師、飛騨国内の在郷町商人らによって行われた。周辺地域の住民は、それぞれの経済力に応じて、開発主体としての鉱山の請負人、山師への物資の仕送人、あるいは下稼人などさまざまな形で鉱山業と関わりをもった。鉱業生産の停滞時には、鉱山集落の住民が、鉱物以外の山地資源に依拠した生業を複合させた生計を営んでいたことも示された。当該地域の鉱物資源開発には、さまざまな属性の住民が重層的に関わり、重要な役割を果たしたことが指摘されている。

第五章の「幕府直轄鉱山、石見銀山の存続とその周辺地域」では、その知名度に反して未解明の部分が少なくない江戸中後期の石見銀山における開発の展開や、銀山の盛衰とその周辺地域との相互関係のあり方について検討された。本章の多くは、学位論文として執筆された未刊行のものである。まず、銀山の繁栄によって交通拠点として発展した周辺地域の集落の実態が示された。著

者は、江戸後期までに石見銀山御料は、経済的には銀山ではなくタタラ製鉄などを中心とした地域に変容したとみている。これらの交通拠点、タタラ製鉄のちに発展する基盤のひとつになったとする。

つぎに、銀山の衰退した江戸中後期における山師の多くは、鉱山業を単独で経営する資力を欠くようになり、大森大官所は貸付銀の利子などで銀山経営の費用を捻出しようとした。この貸付銀を受けた者の中には、タタラ製鉄の資本家である鉄山経営者が多くふくまれていたとする。銀山御料のうち、銀山に近い「御囲村」では、用木を銀山より高値で取り引きする鉄山に納入しようとするケースもあった。繁栄期の銀山は、周辺地域にとつて農圃稼ぎや駄賃稼ぎの需要を生じさせるなど、さまざまな経済効果を与えるものであった。そして、江戸中後期の銀山は、一部の有力山師や銀山方役所の地役人たちのとつた、周辺地域の住民の活力を背景とした方策によって逆に支えられていた、とみなされた。

第六章の「結論」では、第一節の「江戸期における鉱物資源開発の特質」において、第二―五章で検討した個別分析から抽出される事項として、第一に、江戸中後期の鉱山業の画期として、一八世紀初頭と一八世紀中ごろが指摘された。第二に、鉱山開発の初期段階は、ほかの鉱山から訪れる鉱山技術者によって担われることが多かった。そして、その開発が軌道に乗ると、三都や鉱山周辺の在郷町商人や豪農が関与するようになり、後者の関与は一八世紀中ごろ以降に拡大したとされた。第三に、鉱山の周辺地域は、資材の供給地にとどまらず、開発主体を輩出する存在でもあり、その関与は長期にわたるものであったとされた。そして、第

二節の「鉱物資源開発継続の背景」では、鎖国によって鉱物資源の需要が限定的になった以降、中小規模鉱山の稼行が周辺地域や移動する技術者に支えられつつ継続し、鉱山集落はより生産の場としての性格を強めたことなどが述べられた。その上で、「江戸期を通じての非鉄金属資源の継続的な開発は、複合的な生業形態を基本とした局地的な地域の構造と三都を中心とした鉱物資源集荷の広域的な構造との組み合わせからなる重層的な構造のもとに成立していたと理解される」（二三〇頁）と結論づけられた。

以上の成果に対して、評者は、第三章で取り上げられた中津川村の住民や、第四章の飛騨国北部地域で確認された鉱山業に重層的に関与した周辺地域の住民の姿を、山地資源に依拠したさまざまな生業を複合的に営む人びととして理解した。鉱山周辺の住民は、鉱山への労働を特殊な経済活動としてではなく、鉱山業の盛衰に応じて、いかに多くの収入を得るかを関心事としていた。鉱山周辺の住民は、利益の最大化を常に追求しつつ、鉱山業に接してきたのであった。鉱山業は、近世山村の百姓の生計を保つための有力な手段のひとつであったと位置づけられよう。このことは、第五章で検討された石見銀山御領でも、程度のちがいはあれ適合する。著者自らも、鉱山業は「周囲と隔絶された特殊な産業というわけではなかった」（二二七頁）と強調しているように、鉱山への従事を特殊な労働とみるまなざしは、見直されなくてはならない。

鉱山、とくに近世初頭の大規模鉱山は、周辺地域の人びとにとって、出入りも制限された閉鎖的な異なる社会であった。しかし、

労働市場としては開放された存在であり、近世の百姓は鉱山業に<sup>②</sup>関連する産業にもさまざまな形で従事することができた。そして、江戸中後期にたくさん稼行された中小鉱山に対して、周辺地域の人びとは、採掘や加工といった直接的な労働の提供のみならず、物資の供給や輸送といった間接的関与、さらには資本を投下する側として、鉱山業を支える役割を果たすこともあったのである。

山村に関する従来の地理学研究では、近世初頭の大規模鉱山集落を念頭に置きつつ、近世山村の生業から鉱工業を除外する傾向がないわけではなかった<sup>③</sup>。しかし、本書によって、江戸中後期の鉱山において、周辺地域の住民がその労働や経営に深く関わっていた実態が実証された。複合生業論<sup>④</sup>が人文社会科学の諸分野において広く受容された今日、近世山村における百姓の生業のひとつとして鉱山業は理解されなくてはならない。評者は、このことが本書によって決定的に示されたと考える。

ところで、「鉱山業に対する特別視の見直し」について言及したのは、評者がタタラ製鉄の歴史地理学研究にあたってきたことと深く関わる。従来、タタラ製鉄に従事する山内労働者の社会的性格は隷属性・閉鎖性に求められ、鉄を製錬した山内集落は周辺地域の村方とは隔絶されたものとして「特別視」される傾向にあった。しかし、近年の歴史学の成果をみると、相良英輔は、一八世紀末期の山内労働者の多くが妻帯し、一九世紀前半の労働者の通婚圏が村方に藩領を越えて広がり、幕末には村方の宗門帳に帳づけされた者が山内に通いつつ鉄の製錬にあたっていたことなどを確認している。鳥谷智文は、閉鎖的であった山内の社会が、近世後期に至って非技術系労働を村方に依存するようになった結果、

村方との交流を活発化させたという見通しをたてている。そして、評者はタタラ製鉄の稼業された近世中国山地の百姓像を「タタラ製鉄に関わる荷物輸送や鉄穴流し、炭焼きなどと農林業を兼業する人びと」ととらえている<sup>⑤</sup>。

このようにタタラ製鉄の労働とその社会に関する見方は再考されつつあるものの、その方向性については、本書がとらえた鉱山業と周辺の地域社会との密接な関係と、多くの点において共通する。そもそも、著者は、第五章で取り上げた石見銀山御領において、タタラ製鉄を石見銀山の周辺地域の一要素として分け隔てなく扱っている。砂鉄採取業や鉄生産といった鉱工業は、中国・東北地方の山地住民にとっては、生業複合や資本投下の可能性を提供するものであり、鉱工業であるからといって関与しないものではない。近世の山村社会を見直そうとする研究に、本書が的確に反映されることを強く望みたい。

さて、最後に、本書の課題と、今後の研究課題について考えてみたい。まず、本書の課題として評者が感じた点について述べなければならぬ。何分、鉱物資源の開発状況や開発主体、周辺地域との関係などに対して、洗いざらい徹底的に解明する姿勢が貫かれた本書である。苦言を要する部分は見出しにくい。ただし、表の記載内容が時には豊富すぎて、非力な評者は消化不良に陥ることがあった。その一例をあげると、付表1・2に累々と記載され、本文の一六六頁以降にも頻出する「鋸分け」については、結局その意義を十分にはつかみきれなかった感がある。付表1・2は資料としての価値が高いだけに、残念に思われた。また、タタラ製鉄に関心を寄せてきた評者としては、一八六頁に引用され

ている中国地方の鉄生産における一大画期を一七世紀末期から一八世紀初頭とする見解が、現在では見直されつつあることを申し添えさせていただく。

今後の課題として、著者は、異なる地域・時代の鉱山業を扱う必要性を説き、その展望を述べている。しかし、評者の勝手なお願いとしては、著者には近世の鉱山社会と、近世の百姓世界の關係を見直す内容の啓蒙書を刊行していただきたい。著者の師のひとりである田中圭一は、鉱山業の歴史学研究から出発し、近世社会全般に再考をせまる多数の啓蒙書を世に問い続けている<sup>⑩</sup>。中学・高校に勤務する評者の印象では、学術専門書で書き改められた内容が中学・高校の地理・歴史教育に反映されるまで、気の遠くなるような時間を要する。本書のような魅力ある優れた著作をもつ著者には、「鉱山業に対する特別視」を瓦解させる精力的な発信を強く期待する次第である。

- ① 品田光春が「地理空間」四巻二号、二〇一一年に、溝口常俊が「歴史地理学」五四巻二号、二〇一二年に、本書の書評をそれぞれ掲載している。
- ② 荻慎一郎『近世鉱山をささえた人びと』、山川出版社、二〇一二年。
- ③ 例えば、千葉徳爾は、鉱山が独特の閉鎖社会をつくることなどをあげて、鉱山の経営者や労働者を山民にふくめることに躊躇している。千葉徳爾「山の民俗」、「日本民俗文化大系第五巻・山民と海人」、小学館、一九八三年。松山利夫も、鉱物資源が偏在することなどをあげ

て、鉱山労働者やタタラ製鉄の労働者を山地の住民に組み入れることには消極的である。松山利夫「山村の文化地理学的研究」、古今書院、一九八六年。

- ④ 例えば、安室 知「複合生業論」、野本寛一・香月洋一郎編『講座日本の民俗学5・生業の民俗』、雄山閣、一九九七年。
  - ⑤ 評者の研究については、つぎの文献を参照していただきたい。徳安浩明「地理学におけるたたら製鉄の研究動向」、たたら研究、四四号、二〇〇四年。
  - ⑥ 例えば、河瀬正利「たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究」、溪水社、一九九五年。
  - ⑦ 例えば、相良英輔「たたら製鉄業における山内の人口動態と山内「掟」、山陰宗門改帳研究会編『宗門改帳からみる山陰の近世社会2』、二〇〇七年。
  - ⑧ 例えば、鳥谷智文「召抱人」の構成——『明治式巳十月召抱人別書出帳（櫻井家文書）の分析——』、山陰宗門改帳研究会編『宗門改帳からみる山陰の近世社会2』、二〇〇七年。
  - ⑨ 徳安浩明「近世・近代における中国山地の開発とタタラ製鉄——美作国西々條郡上齋原村の事例——」、地理科学、五四巻三号、一九九九年。
  - ⑩ 例えば、山崎一郎「十七〜十八世紀前期、松江藩の鉄山政策と鉄山業の展開」、史学研究、二六七号、二〇一〇年。
  - ⑪ 例えば、田中圭一『百姓の江戸時代』ちくま新書、二〇〇〇年。田中圭一「村からみた日本史」ちくま新書、二〇〇二年。
- (A5判 三〇〇頁 二〇一一年二月 古今書院 税別七八〇〇円)  
(ヴィアートル学園洛星中学・高校教諭)